

いとせめてこひしき時はむば玉のよるのころもをかへしてぞきる

〔古今和歌集十七〕かただがへに人の家にまかれりける時に、あるじのきぬをさせたりけるを、あ

したにかへすとてよみける、

きのともものり

せみのはのよるの衣はうすけれどうつりがこくも匂ひぬる哉

〔伊勢物語上〕むかし紀の有つねといふ人有けり、略中としごろあひなれたるめやうくとこば

なれて、つるにあまになりて、あねのさきだちて成たる所へゆくを、男略中まづじければ、するわ

ざもなかりけり、略中かの友だちこれを見て、いとあはれとおもひて、よるものまでおくりて

よめる、

年だにもとをとて四はへにけるをいくたび君を頼みきぬらむ

〔商賣往來〕夜著蒲團、

〔名産諸色往來〕夜著布團、隨好盡美、

〔倭訓栞中編二十八〕よぎ 夜著の義なり、古書に直宿物と記せる是なり、地は多く緞子なりとい

へり、即被なり、全浙兵制同じ、奥州によかぶりと云、

〔物類稱呼四衣食〕寢衣よぎ 奥州にてよかぶりといふ

〔近代世事談〕夜著

慶長元和のころより專にすと云むかしは小寢卷とて、常の衣服のすこし大きなを下に巻て、

そのうへに蒲團をかけて、上つかたもこれをめしたり、連歌四季よせ冬の部に、ふとんはありて

夜著なし、誹諧御傘のころは、もはやありつれども、古法をまもりて、貞徳老人も夜著を、冬季にせ

ざる也、

〔松屋筆記九十五〕夜衣キといへる名目